

ハリファックス国際安全保障フォーラムに出席して



日本ではまだあまり知られていないが、毎年11月にカナダの東海岸にあるハリファックス市では「ハリファックス国際安全保障フォーラム」という大きな国際会議が開催される。この種の国際会議としては、ドイツのミュンヘンで毎年2月に開催されるミュンヘン安全保障会議、シンガポールで6月頃に開催されるシヤングリラ対話などが有名である。カナダのフォーラムは2009年に始まった比較的新しい企画であるが、2019年の会合には70カ国から約330名が参加した大きな会議となっていた。

私自身は過去7回出席する機会があり、各回の会議が知的刺激に富んだ企画をするので感心するところが大きい。著名人を招いても、長いスピーチはない。せいぜい10分くらいで、あとは司会者との間で対話形式による「おしゃべり」を展開するとか、4、5人によるパネル形式で討論し、一通り終わると会場からの質問に応じる形をとる。

今回は米国家安全保障問題担当大統領補佐官ロバート・オブライエン、現ウクライナ大統領ポロシェンコ、米インド太平洋軍司令官デビッドソン海将などの「おしゃべり」が興味深かった。

フォーラムは、大統領、閣僚や司令官、参謀長クラスの軍人のほか、著名な運動家な

西原 正 (平和・安全保障研究所理事長、元防衛大学校長)

どを招き、安全保障問題や人権問題を討論し、世界各地の権威主義体制を批判して、民主主義陣営の強化に貢献することを自論む。

そのため、アジア、アフリカ、中東、中欧の専制体制と戦っている人を招き、自由・民主主義・人権の擁護を推進している。もちろん中国の人

たちは招かれない。その半面、ロシア、ウクライナ、シリア、ベネズエラなどの反体制リーダー格を招く。今回は、アジアではチベットの亡命政府首相や新疆ウイグルからの亡命者で組織する世界ウイグル会議議長らが参加していた。

また全体会合は発言引用可能だが、分科会は発言引用禁止という区別を設けて、自由

な意見交換を促すようにしていた。これも会議の重要な側面であった。分科会には夕食を挟んでの小グループ(10名から30名)討論も行われた。

私は「中国の世紀は来るのか」と題するグループの夕食会の冒頭で10分間しゃべる役を与えられた。

フォーラムの主催者はワシントンに事務局を構えるカナダの民間組織であるが、会議でのホスト役はカナダの国防大臣である。多忙なハルジツト・シン・サージャンが計3日の会議の大半をハリファックスで過ごし、3日目(日曜日)の朝には、参加者の有志とともに5キロメートルのマ

ラソンをリードする。フォーラムの主導者は米大



フォーラムに参加した各国の女性軍人と記念写真に納まるカナダのハルジツト・シン・サージャン国防相(中央背広) =フォーラムHPから

目立つ女性性の活躍

知的刺激に富む企画に感心

こととした。これによって軍における女性の地位向上を支

が、フォーラムは昨年の死去を悼んでジョン・マケイン賞を設けた。第1回の受賞者は香港の「雨傘グループ」となり、会議ではそのリーダーの一人が出席して賞を受けた。

さらに興味深いのは、参加者の約2割が軍人であることである。軍人は全員が軍服で参加することになっていた。ハリファックス・フォーラムは昨年からNATO諸国の軍の中から優秀な女性のリーダーを約10名選抜して表彰する

援する姿勢を見せた。

こうした国際会議に出てみても感じるのは、女性の活躍が目立つ点である。まず参加者約330人のうち女性は約80人、そして全体会合8つのうち二つは女性による司会、第1日目の夜の分科会では二つとも女性、2日目の夜の分科会は18のうち四つは女性という具合であった。300人を前に堂々と司会する姿にはさすがしさを感した。これまでに参加した日本女性は一人だけである。

各国からの参加者が一体となり、議論が進められる「ハリファックス国際安全保障フォーラム」(同フォーラムHPから)

このフォーラムに、日本から防衛大臣を含め、参加者がさらに増え、より活発に議論に参加することを期待したい。

